寄稿

# 漢方医学に対するWHOの取り組み

東アジア伝統医学は古代中国を起源としているが、それぞれの国で独自の発展を遂げ、中国では中医学、韓国では韓医学、日本では漢方として似て非なるものとなっている。そもそも「漢方」という言葉自体が江戸時代におけるわが国での造語であり、国際的にはKampo Medicineといえば日本の伝統医学、ということになる。

WHOには伝統医学を扱う部門が、ジュネーブ本部、西太平洋地域事務局、アフリカ地域事務局に設置されている。西太平洋地域事務局の伝統医学部門は、責任者として日本、中国、韓国選出されてきた。現在は韓国からのDr. Choiがその責任者となっている。西太平洋地域がカバーする三十七カ国のうちにはチベット医学、モンゴル医学なども含まれるが日中韓を中心に、東アジア伝統医学の標準化が進められている。

日本側の受け皿は日本東洋医学会など四つの学術団体ならびに二つのWHO伝統医学協力センターの六つの団体からなる日本東洋医学サミットという組織がこれに当たっており、厚生労働省では研究開発課が窓口となっている。過去四年間、西太平洋地域では用語の標準化に取り組んできた。その成果は二〇〇七年八月に出版され、ホームページでもダウンロード可能である（http://www.wpro.who.int/publications/PUB_9789290612487.htm）。

同じく西太平洋地域の活動の一つとしてICD10準拠の東アジア伝統医学分類を作成している。このプロジェクトは渡辺が議長を務め、過去五回の会議を経て、アルファ版を作成した。二〇〇六年にはチュニジアで開催されたWHO-FIC（WHO family of international classification）ネットワーク会議で計画をプレゼンし、二〇〇七年にはイタリアでアルファ版を報告した。その結果、WHO-FICの関連分類に入ることが原則認められた。ICD11改訂時には派生分類としていくようにプロジェクトを推進していく予定である。日本側の対応としては日本東洋医学サミットで漢方版を作成し、厚生労働科研費で検証中である。その一部はWHO-FICイタリア会議でも報告してきた（写真）。

現在漢方医学は医師の七割以上が日常診療で用いているが、使用実態の統計が存在しない。その理由は保険診療システムの中で、漢方的分類が存在しないためである。しかしながら同じ疾患でも漢方薬を用いる時は漢方医学の体系で選択しているはずであり、それをきちんと統計を取っていくことが今後必要になると思われる。そうした意味でもICDの仲間入りをする意義は大きい。

（渡辺賢治　漢方医学63回）

漢方の分類の検証についてWHO-FIC会議で発表。WHO東アジア伝統医学分類作成チームとともに

## クラス会

### 36回生　卒後五十年目のクラス会

平成十九年十一月十日の土曜日に品川の開東閣（旧岩崎邸）において、36回のクラス会を、石渡君のお世話で開催した。関東閣は都会の真ん中にあって、広大な緑に囲まれた庭に、旧岩崎邸の昔の面影を残した重厚な建築で、生憎の雨で残念ながら、充分お庭を探勝出来なかったのは心残りであったが、皆久しぶりの再会を楽しんだ。

出席者は渡辺隆夫夫妻、秋山實夫妻、田仲基宏夫妻、里和宏夫妻、中村芳郎夫妻、中村茂夫妻杉田宏夫妻、田崎寛、加藤寿子、北村雄哉、大井博之、古田穣治、矢部裕、山本一郎、斉藤豊昭、増田隆正、星田昌博、野末洋、竹内宏、服部光男、古泉桂四郎、高木その、戸谷重雄、石渡弘一、有森正樹の三十二人であった。幸い今年は亡くなった者もなく、お互いの健康を喜びあった。

まず、クラス会のためにわざわざニューヨークから駆けつけた田崎君の挨拶と乾杯で始まり、矢部君から最近の医学部と慶應義塾一二〇周年の記念事業の話があり、その後、各々の近況報告があったが、後期高齢者に仲間入りした我々のクラスも田崎君のように外国で未だ教職でがんばっているもの、開業で現役で活躍している増田君をはじめ、まだ元気で活躍している人も多く、第二、第三の職場でそれぞれの力を生かして社会に貢献している。

しかしながら、さすがに年齢には勝てず、クラスの一割強が前立腺がんで何らかの治療を受けていたり、高血圧や心臓病、糖尿病をもっているのも多いのも又現実である。

時の経つのも忘れておいしい料理と雰囲気を楽しみながら旧交をあたためながら、来年の再会を約して散会した。

（有森正樹）

### 41回生　卒業四十五周年記念

平成十九年は卒後四十五年にあたる。十一月十日（土）午後六時から東京会館ゴールドルームで四十一回生クラス会を開催した。最も若い者でも古稀を迎える頃合いとなった。卒業当初は各科・医局ごとに幹事役をもちまわりしていた。本務から退任する者が多くなった頃から名簿順に幹事をすることになった。今回はヤ～ワ行が幹事となった。

受付で住所録、近況報告集、緊急連絡網などの資料を配布した。資料は、幹事はもとよりだが特に桑野君、丸山君の献身的奉仕により作成された。

開会に先立ちこの一年に逝去された立澤夫人隆子様と森山昌樹君の冥福をお祈りし黙祷をささげた。脇田幹事の司会により、柳田幹事の会計報告、山口幹事の乾杯ののち、全員が順次挨拶、近況報告をおこなった。今井君と新夫人にお祝いの花束をお贈りした。山崎幹事の閉会の辞、そして記念撮影。明年十一月の再会を約して散会した。（ハワイ在住の鈴木光明君からも元気で活躍中の旨のメールが寄せられた。）

出席者：荒井優子、池田高明夫妻、今井敏郎夫妻、岩田清二夫妻、小川勝夫妻、尾形佳郎夫妻、角本陽一郎、笠原正男夫妻、金子章道夫妻、神坂幸良、亀谷徹夫妻、川上隆、河合健夫妻、功刀弘夫妻、桑野研司夫人、小林英郎、小峰和茂、高野信篤、佐藤善之、故斎藤誠次（小澤）夫人、桜井秀也、清水敬一郎夫妻、立澤寧、富田友幸夫妻、根本謙、馬場謙一夫妻、穂積登、星昭輝夫妻、丸山圭一夫妻、三井健司夫妻、八木嬉昭夫妻、八木剛亜夫妻、柳田純一、山口隆久夫妻、山崎史朗夫妻、脇田幸一夫妻。（柳田・脇田）

41回生同窓会，東京會館，2007.11.10

## 三四会支部だより

### 平成十九年度三四会渋谷区支部例会のご報告

平成十九年十一月十日（土）午後四時三十分より平成十九年度三四会渋谷区支部例会が十九名の出席のもと南国酒家渋谷桜ヶ丘店で開催された。当日はお忙しい中、慶應大学病院より戸山芳昭病院長が、三四会本部からは村井勝副会長がご出席された。

先ず、増子幹事の開会の辞および支部長の挨拶、リー幹事の事務報告後、村井三四会副会長がパワーポイントにて詳しく三四会事業並びに慶應赤倉アカデミー（KAA）のご紹介をして下さり、戸山病院長は慶應大学病院のプロジェクトおよび慶應二五〇年記念についてのお話をされた。お二人から三四会ならではのお話を伺い皆暫し慶應気分に酔いしれた。

集合写真撮影後会食に移り、出席全会員から近況報告などのスピーチをいただき和やかな時を過ごすことが出来た。最後に山口幹事が閉会の辞を述べられ閉会した。

出席者：戸山芳昭病院長、村井勝三四会副会長、内匠昭支部長、増子昭幹事、山口雅成幹事、リー啓子幹事

（以下出席会員敬称略）

伊藤國彦、中西芳郎、高田勗、武石輝夫、武石展代、榊原功一、内匠章子、神崎仁、小滝周曹、林和彦、水町重範、村木敦郎、丸岩博文

（リー啓子　内60回）

### 東海支部

十二月八日（土）名古屋観光ホテルにおいて十九年度総会が開催された。

愛知、三重、岐阜三県支部を統合し、東海支部として昨年発足し、今回が実質上の第一回総会となったわけで、末松医学部長をお招きし、出席会員数三十二名。医学部長から義塾一五〇周年記念事業の概要、中でも九十周年を迎え、一〇〇周年を目前にした医学部の将来構想、医学部並びに慶應病院の建築構想、現今抱えている問題点の改革指針などパワーポイントを用いての詳細なお話を拝聴し、会員は大いに感銘を

## 近況報告

①家族　②近況
③趣味
④三四会特に新聞への意見

**中島　洋（36回）**

一、妻知子との二人住し　長男　健（産婦人科）、長女　桂子（在カナダ）、次女　典子（小児科医）

二、分娩（年間三百五十件）も行っている産科開業医です。

三、ピアノ（発表会に年間一～二回出させて頂いています。）

**富田恭弘（37回）**

一、妻、長女（孫一人）、次女（既婚）、長男（孫二人）小生の病院勤務

二、春に髄膜炎で一ヶ月慶應に入院しました。未だに後遺症に悩まされています。県病院協会副会長国保労災審査員はまだ勤めています。老人二人では家も庭も管理出来ませんのでマンションに移りました。

三、書道、謡小唄、囲碁、ゴルフすべて休診、旅行は国内のみ。四、いつもたのしみに読ませていただいています。

**植野悦司（63回）**

一、妻、長男、長女

二、埼玉社会保険病院小児科勤務

三、旅行

**川久保洋（63回）**

一、妻と子供二人の四人家族

二、平成十七年四月より帝京大市原病院（現ちば総合医療センター）皮膚科教授を拝命し、優秀な若い諸君とともに医療過疎と向きあっています。

三、自転車。昨年より学生の頃の仲間と自転車クラブを復活、活動しています。

四、優秀な先輩・後輩のお姿に大変勇気づけられます。

**丹生谷晃代（63回）**

一、夫（防衛医大精神科・67回生）、二男一女（中二、中一、小六）

二、六〇〇床の精神病院の副院長業務と、反抗期の子供達を擁する家庭との両立に、充実しながらもヘロヘロの日々です。